

戒壇院（重文）

最澄が最も強く願ったことは、比叡山において大乘戒のみによる授戒を行うことであった。それまでは、国家公認の僧侶になるための授戒は、いずれも小乗仏教の寺院である奈良の東大寺、筑前（現在の福岡）の観世音寺、下野（現在の栃木）の薬師寺のいずれかでのみ許されていた。小乗仏教のほうが大乘仏教よりも歴史が古い。大乘仏教の教えは、すべての人が現世において仏になる可能性を持っているという点において小乗仏教と異なっている。比叡山独自の戒壇院をもつことは奈良の僧綱からの独立を意味していた。

最澄は『山家学生式』や『顕戒論』をあらわして、比叡山独自の受戒について示し、再三嵯峨天皇に勅許を願った。

最澄が唱えた戒（一乗戒）は、一度これを授かれれば、悪を止めて善を修すという根本的な原動力が得られて失われることなく、仏性を現わすことができるとしたもので、最澄の念願が叶って、戒壇院建立の許しが出されたのは最澄が56歳で入寂した7日後の、弘仁十三年（822）6月11日のことであった。最澄の高弟の義真（ぎしん 781－833）が戒壇院の建設を指揮した。室内には授戒の師として釈迦牟尼仏、文殊菩薩、弥勒菩薩が祀られている。今でも毎年ここで授戒式が行われている。

最澄筆の『山家学生式』の石碑は、伝教大師童形像と並んで、根本中堂脇に建てられている。